

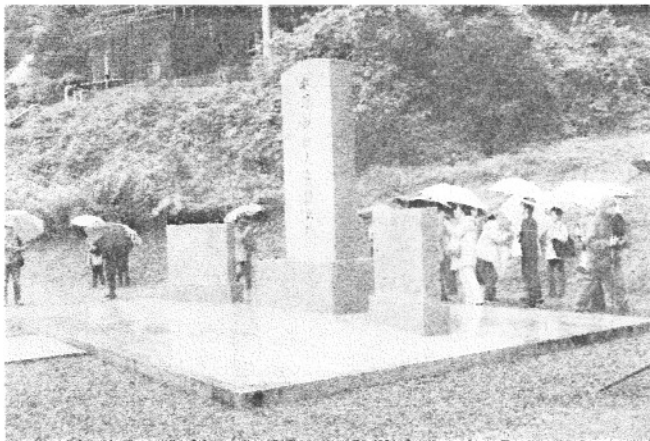
第10回 中国人受難者を追悼し平和と友好を祈念する集い 及び 追悼法要

村中 信行

今年の「中国人受難者を追悼し平和と友好を祈念する集い」は朝からの雨模様の天候の中で開催された。昨年の「集い」でもやや小降りの雨が降ったように記憶するけれども、それもたいした雨ではなく、これまでの「集い」は比較的天候に恵まれ、おだやかな秋の気候の中で取り行なわれてきたと思うのだが、今年は朝からしっかりと降られてしまった。「集い」の数日前に記念碑の清掃に数人が集まったが、すでにこの日から空模様は怪しく、天気予報では「集い」の日の雨は避けられないようであった。そのときに居合わせた仲間たちの相談で、会場のセッティングや進行なども考慮せざるを得ないという話になっていたのですが、それなりに対応はできたように思うが、それにしても、…空に向かって言っても仕方ないのだが…こうした日にはすっかりした秋晴れが望ましいものを、とつい愚痴りたくなってしまう。

フィールドワーク

10月15日、今年も「集い」に先立って安野における中国人の強制連行、強制労働の歴史についての簡単なフィールドワークが11時から行なわれる。今回は参加人数の多さや雨ということもあり、記念碑見学の後、およそ25人ずつの二グループに分か



記念碑を見学する

れることとした。まずは記念碑前のテント内で当時の様子をよく知る栗栖さんの証言を聞くグループ、そして発電所の上の貯水槽に登って川原さんの説明を聞くグループ。それぞれのグループで説明や証言を聞いた後に交代するという段取りだ。僕ははじめに栗栖さんの証言を聞いた後に貯水槽へ登るグループについて回った。当時の中国人の生活ぶりや食糧



テントの中で証言する栗栖薫さん

事情について、栗栖さんは直接見たり、聞いたりしたことを話されるのだから大変貴重な証言だ。さらに聞く者にわかりやすいように当時の収容所の図面を自作して来られているという心遣いにも頭が下がる。

最初に貯水槽に登ったグループが降りてくると交代して栗栖証言を聞き終えたグループが貯水槽へ登る。貯水槽は発電所のある場所からは65メートルの高さがあるという。記念碑は発電所より少し小高いところにあるが、それでも結構な高さだろう。雨の中を傘を差して足もとの悪い山の坂道を貯水槽まで登るのはなかなかしんどい。僕がついて回ったグループには足の悪い婦人がおられて上まで登ることをあきらめた方がおられたのは残念であった。

貯水槽では中国電力の社員の方から安野発電所の

概要の説明を受けた後、川原さんから貯水槽、導水路工場の説明があった。私たちが立っているこの貯水槽から65メートル下のタービンに向けて一気に水が落下して発電するわけだが、その水はここから8キロメートル先の土居の取水口から延々と導水トンネルを通過してたどり着いている。この日は貯水槽も導水トンネルもなみなみとした水量があったが、以前劉宝辰さんが見学されたときには、点検作業で水が抜かれていたことがあったそうで、そのときは導水トンネルに降り立つことができ、自分の背丈よりも高い導水トンネルを実感することができたそうだ。この大きさのトンネルが山の中を貫いて8キロ先まで続いていること、当時の食糧事情や生活環境、おそらくは貧相な工具のことなどを思いながら中国人の過酷な労働が導水トンネルの暗闇の向こうに見えたかもしれない。その労働でできた発電所は今も現役で発電し続けている。

また、工場の現場には朝鮮から徴用されてきた労働者もいた。彼らは技術を持った人たちも多く当時は「日本人」という位置づけでもあり、ダイナマイトでの発破作業や工具の修理修繕などの仕事、現場の監督などに従事しており、中国人とは異なる待遇であったろうと思われる。中国人たちの中にも大隊長や中隊長などの階級がもうけられ、幾重にも重層的に作られた分断支配の構造がうかがわれる。余談だが、現代の社会でも、働く者が企業の中で職制だけでなく、正規や非正規、正規の中にも地域限定社員、非正規の中でもアルバイトから期間雇用社員や契約社員、派遣社員などそれぞれの企業でいろいろと呼称に違いはあるが、何層にも分断され、孤立化させられていることに連想が及ぶ。

記念碑前の集い

フィールドワークは12時40分頃に終わり、おにぎりなどで軽く腹ごしらえを済ました後は午後1時から「集い」の受け付け開始、1時30分から「集い」の始まりである。そして今年の「集い」は「西松安野友好基金運営委員会」が主催する最後の「集い」

となり、来年からは「広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会」が引き継ぐこととなる（一昨年から「基金運営委員会」と「継承する会」が共同開催、今年末「基金運営委員会」は解散）。中国からは基金運営委員である張振倫さん、劉宝辰さん、修剛さんの3人が参加された。「集い」の参加者はおよそ100名であった。

「集い」は例年通り、岡原美知子さんの司会と楊小平さんの通訳で始まる。まず黙祷をした後、岡原さんから記念碑についての説明があり、主催者挨拶へと移る。基金運営委員長の内田雅敏さんの挨拶では西松建設と中国人受難者・遺族との和解事業を、戦後における中国人遺骨返還運動から始まる日中民間交流という大きな歴史の流れの中でとらえて、国と国との間に厳しく難しい関係があるとき、民間での人と人との交流こそがその関係に変化をもたらす大きな力になるというお話があった。次に今年から「継承する会」の共同代表となった足立修一弁護士の挨拶では、一昨年から「継承する会」が原水禁広島大会で安野フィールドワークを行ない、歴史の継承と和解の意義を広く社会に訴える活動に取り組んでいることが紹介された。中国人受難者・遺族代表の邵義誠さんは高齢で体調が思わしくないため来日されず、家族である張振倫さんが邵さんのメッセージを代読した。西松建設の代理人弁護士高野靖彦氏は都合により欠席されたがその挨拶は資料に掲載されている。

来賓からは安芸太田町長小坂眞治さん、中国駐大阪総領事館から朱彤さん、善福寺住職藤井慧心さん、



小坂町長

朱彤領事アタッシュ

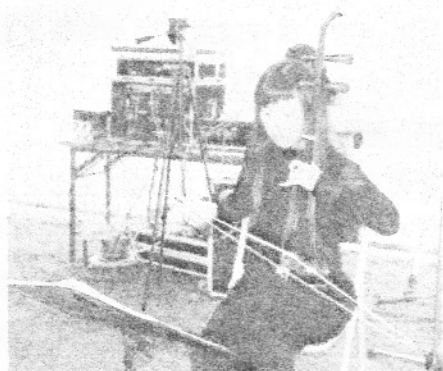


藤井住職

石岡委員長

広島県教職員組合執行委員長石岡修さんから挨拶をいただいた。

そして恒例となった竹内ふみのさんの二胡の音色を伴って、参加者の記念碑への献花が雨の中行なわれ、「集い」はしめやかに終了した。残念ながら記念碑前での記念撮影は、雨ということで中止となった。



善福寺で追悼法要

「集い」の終了後、場所を善福寺に移して法要が行われる。本堂左手には以前、被害者・遺族から中国語で書かれた（中国語がわからないためははっきりとはわからないのだけど、おそらく感謝の意の込められた）掛け軸がかけられていた。住職の藤井慧心さんは今年の4月に基金の和解事業として行なわれた天津市烈士陵园内の「在日殉難烈士・劳工纪念馆」での追



焼香する参加者たち

悼行事に参加され、現地での法要も行なわれた。亡くなられた方たちの祖国へ帰りたいという思いなどが伝わってきたようだ、そのときの感想や、今日の二胡の演奏にもそうした心が感じられたと話された。例年のように焼香のための線香も日本のものと中国のもの二種類用意され、中国の線香は中国そのものを示しているという思いであると話されて、参加者には自分の好きな方で焼香するように促された。中国から贈られた掛け軸や中国流の線香は住職が大事に考えておられる心の交流の証のように感じられる。

焼香が終わり、基金運営委員の張振倫さん、劉宝辰さん、修剛さん、それぞれから挨拶があった。

張さんは「今回の集いに新しい顔がたくさんあり、大変うれしい。これからもこの歴史を継承していかなければならない。善福寺では毎回法要をしていただき遺族、家族を代表してお礼を言わなければなら



受難者家族の張振倫さん（右は通訳の橋小平さん）

ない。運営委員会は今年で解散するが私は来年個人として来日したい。この活動に関係して20数年たつが、かけがえのない友情ができた。これからも友情を伝えていきたい。今後も活動に参加してください。」という挨拶。

劉さんからは「中国での遺族や家族の調査をし、和解後も多くの遺族を見つけた。私が学生の頃に日中友好が大事だと教えられたが、遠いところの話だと思っていた。1992年から調査を始めて、その考えが変わった。日中友好は身近なことであった。強制連



元河北大学教授の劉宝辰さん（左は藤井住職）



天津外国語大学長の修剛さん

行の調査を通して日中の民間交流をしている。民間交流に乗ってここに来ることができた。国家間の交流は民間交流から始まった。民間交流は大事でこれからも発展させないといけない。来年は来れるかどうかかわからないが、中国で力を尽くしたい。今後も活動を続けてください。」

修さんは「最後の集いに参加できて喜んでいる。感謝の気持ちです。93年から活動に関わってきたが、広島には8回くらい来た。裁判が始まって失敗、成功、失敗ときて最後に和解ができた。この活動に関わって光栄だ。市民の皆さんに感謝している。ここまで来れるとは思わなかった。足立弁護士や新美弁護士の先生たちにも感謝、皆さんの努力に感謝します。若い

人の顔も見える「継承する会」の活動に期待します。日中友好というけれど人間と人間の友好が大事だ。」

以上僕の走り書きのメモからの引用なので正確ではないかも知れないが、3人の方の挨拶の概略です。修さんは挨拶の途中、新美弁護士の名前を出されたとき、涙ぐまれたように見えたのは僕の思い違いだったろうか。

最後に、川原さんから「来年も「集い」を開催する10月の第3日曜日にお会いしましょう。8月5日には原水禁のプログラムとしてフィールドワークを開催し、善福寺をお借りして学習会、昼食会をするのでご参加ください。」と締めくくりの挨拶を受けて解散した。

会費納入とカンパのお願い

2009年10月の和解成立以降、継承する会は西松安野友好基金の和解事業と歩みをともにしてきましたが、このたび基金が役割を終えて解散する運びとなりましたので、今後は継承する会が和解事業の精神を引き継いでまいります。毎年10月に記念碑前で「中国人受難者を追悼し平和と友好を祈念する集い」を開催するなど、和解の意義を広め、安野の歴史を継承する活動に取り組んでいきたいと思っております。

今年度の会費が未だの方は会費を納入してくださいませようお願いいたします。会員でない方は会員になって継承する会の活動をお支えください。カンパも歓迎いたします。年会費は個人1,000円、団体5,000円です。発送作業の都合で、振込用紙を全員の方に同封していますので、会費納入済みの方はご容赦ください。

なお、振込用紙右端の受領証をもって領収書とさせていただきますので、ご了承ください。よろしく願いいたします。